

## 論文

ビジネスモデルとイノベーション：  
批判的検討

池田 伸\*

## 要旨

ビジネスモデルについて、実務では受容される一方、研究において否定もしくは等閑視されている事情に関して、その概念規定に明確さやアカデミアでの合意がなく、したがって分析にとっての有用性や知見の累積性に乏しいことが指摘できる。対照的に「ビジネスモデル」は新規性や変化などの差別的な概念と結びつけられることがしばしばである。典型的な新規性に関する概念は「イノベーション」であり、ビジネスモデル・イノベーション、BMIという複合概念も一般化しつつある。さらに、新規性は主体（企業者）による選択と結びつく。問題は、なぜ「ビジネスモデル」が「イノベーション」に代表されるような新規性を帯びた差別的な概念および主体性とコロケーションで使用されるような親和性を持つのか、反対に現行のビジネスモデルとされるものはなぜ等閑視されるのか、その場合の研究上の課題は何か、である。

これらを明らかにするために、本稿ではまず「イノベーション」の系譜論的検討を行なう。まずルネサンス期の著作からシュンペーターの前半期の論稿までをおもな対象とし、その中で「イノベーション」および関連概念の用法・用例の変遷を追跡し、それらとビジネスモデル概念との関係についてBMIを含めて検討する。そして、そのような研究の方向性から生じる既存のビジネスモデルの分析の欠陥やそれによるバイアスの可能性について報告する。

## キーワード

ビジネスモデル、イノベーション、ビジネスモデル・イノベーション BMI, J. A. シュンペーター

## 目次

1. 序論
2. ルネサンス期以降のイノベーション論
3. シュンペーターの「新結合」
4. イノベーションから生産関数へ
5. BMIの問題点
6. 要約と結論

新しいものはつねに謀反である

徳富蘆花

## 1. 序論

ビジネスモデルについて、実務では受容される一方、研究において否定もしくは等閑視されている事情に関して、その概念規定に明確さやアカデミアでの合意がなく、したがって分析にとっての有用性や知見の累積性に乏しいことが指摘できる。この点にかかわり、一つは理論的に戦略論との差異や区分、包摂関係が未整理な点があげられる。また、「ビジネスモデル」が産業論や実証的な研究枠組みと結びつけて検討されることが少ないように思われる（たとえば、池田 2017, Foss & Saebib 2018）。

対照的に「ビジネスモデル」は新規性や変化などの差別的な概念と結びつけられることがしばしばである。典型的な新規性に関する概念は「イノベーション」である。さらに、「ビジネスモデル・イノベーション」Business Model Innovation, BMI という複合概念も一般化しつつある。さらに、新規性は主体（企業者）による選択と結びつく。問題は、なぜ「ビジネスモデル」が「イノベーション」に代表されるような新規性を帯びた差別的な概念および主体性とコロケーションで使用されるような親和性を持つのか、反対に現行のビジネスモデルとされるものはなぜ等閑視されるのか、その場合の研究上の課題は何か、である。

これらを明らかにするために、本稿ではまず「イノベーション」の系譜論的検討を行なう。まずルネサンス期の著作からシュンペーターの前半期の論稿までをおもな対象とし、その中の「イノベーション」および関連概念の用法・用例の変遷を追跡し、それらとビジネスモデル概念との関係について今日の BMI を含めて検討する。そして、そのような研究の方向性から生じる成果、また欠缺やバイアスの可能性について報告する。

## 2. ルネサンス期以降のイノベーション論<sup>1)</sup>

英語での「イノベーション」の用例として *OED* には 16 世紀から *innovation*（当時の綴りは *u* に *v* を通用させている）の語が採録されているが、およそ新しいやり方や新機軸という理解のもと、それを政治や法制に適用したのであろう革命、それに引き続き発生しがちな騒乱等を意味するような用例が多数見られる<sup>2)</sup>。

たとえば、*revolution* の下位項目の下に掲載されているエントリーに 1598 年に出版登録されたシェークスピアの史劇「ヘンリー 4 世」第一部からのテキストがある。無論史実どおり

ではないが、1403年のシュルーズベリーの戦いの前夜にイングランド王であるヘンリー4世が、彼のもとへ訪れた相手方の貴族の論難にたいして、「貧乏な不平党共の…奴らはごった返す革命沙汰 *hurly-burly innouation* さえ聞けば、口を開けばなしにして腕を扼する<sup>3)</sup>」、と答える台詞がある。このように当時は政治的かつ否定的な文脈で用いられ、劇中では「ハル王子」が「ホットスパー」との一騎打ちに勝ち、歴史的にヘンリー4世によって謀反たる「イノベーション」は潰えるのである。

*OED* 以外で政治的な文脈で用いられている例は1532年に死後出版された『君主論』(マキアヴェリ1998)に見られる。後出のロジャーズ(1990, 2007)の第1章の題辞に採録されている「みづから先頭に立って新しい制度を導入すること以上に、実地に困難が伴い、成功が疑わしく、実行に危険がつきまとうものはない」(マキアヴェリ1998: 46)以下の『君主論』第6章の引用部分には、厳密には英訳の「イノベーター」に相当する語は含まれない。しかし、それに続く箇所には、「改革の側に付く者たち」*innovatori* すなわちイノベーターにとって「軍備ある預言者」である必要性が説かれる(同前: 47)。動詞形も含め別の箇所においてイノベーション *innovazioni* は「改革」の記憶も理由もない(同前: 6)や「反乱」を考えつかないようにさせる(同前: 163)とされているので、ここでもイノベーションのような新機軸は政治的であり、価値的にも決して肯定的に扱われているようには考えられない。

ところが、シェークスピアの同時代に戻ると、フランシス・ベーコンがまさにイノベーションに関するエッセーを残している。彼の「随想」第3版が1625年に出版されたときに、それまでの版にはなかった「革新 *innovation* について」という第24項が出現した。そこでは、イノベーションはその初期には未完成であっても時代と人為とによる新規性に意義があり、一般には慣習が支配するであろうが時代には必ず変化があるので因循に陥らないようイノベーションが求められ、時代とともにあるときほどイノベーションは大きく静かに進行して社会に影響を与える、とされている(ベーコン1983: 111-2)。短文ではあるが、イノベーションが主題名とされ、その対象が直接政治的とまではいえず、より一般的・中立的に用いられているように見える。とくに、そこで展開されている時の要因論は印象的で、今日の「イノベーション」論に通底しむしろ凌駕する用例といえる。

時代は下って19世紀末に至り、近代社会の形成とともに生じた仏社会学の勃興期において、G. タルドはある事柄の流行や浸透の過程に個々人の「模倣の法則」の機序の解明を研究課題とした(タルド2016)。ここにおいて、問題は2つに分岐することとなり、一つはイノベーション自体であり、いま一つはそれがどのように普及するか、いいかえればイノベーションの実現、とである。後者の問題構成とは、たとえば「話し方、神話学の思想、産業上の手順」など同時代に100件のイノベーションがあれば、そのうち10件しか広まらないのはなぜか、という問題である(同前208)。彼が個人間の模倣について関心があったのはさまざまな事項におけ

る「イノベーション」の受容の過程であり、その後 20 世紀になるとこのような研究領域は普及問題として取扱われるようになる。その後の研究の一つの到達点であるロジャーズ (1990, 2007) においては、タルド以降の人類学や農村社会学の系譜をたどりつつ、イノベーションのリニアな段階を同定し、そのうちとくに「普及と採用」から「帰結」へ至る普及過程について、マーケティングでのバスモデルなどを参照しながら採用者の分布や属性について検討し、具体的には農村での新規の公衆衛生上の施策や農法を中心に、ドボラックキーボード、ラップミュージック、報道などさまざまな事例の普及を対象として研究を行ってきた経過をまとめている。

他方タルド (2016 : 29) においては、イノベーション自体については「発明あるいは発見」*inventions ou découvert* であり、「言語、宗教、政治、法律、産業、芸術」などの社会現象においてどれほど小さいものでもそれに先行するイノベーション *innovation antérieure* にたいしてもたらされたイノベーションや改良 *perfectionnement* のこととされる。「イノベーション」が再帰的に用いられて複雑ではあるが、以前のイノベーションが普及して常態と理解されているらしい点が注目される。いずれにせよ、これらはルネサンス期と比較して、イノベーションの意味する対象が政治的なものから社会一般に拡大し、規模にかかわらず事態の改善の累積をもたらすものが想定されている。現代のロジャーズ (2007 : 16) ではこの傾向がさらに進み、規模の大小はもちろん「個人…によって新しいと知覚されたアイデア、習慣、対象物」であって客観的なものではなく、「あるアイデアが個人にとって新しいものと映れば、それはイノベーションである。」と極度に一般化され主意主義的にとらえられている。これは模倣・普及研究では「イノベーション肯定 (を当然とする) バイアス」*pro-innovation bias* を排して中立的な意味での新規性について、個人レベルでの受容を問題にしているためと考えられる。

以上より、「イノベーション」は 16 世紀前後はおもに法制上を含む新機軸を意味し、現秩序維持の立場からは叛乱をも意味するものであった。その後 20 世紀半ばまでのイノベーション研究とは広範囲の人間活動で見られる何らかの新規性について、それらが社会にどのように伝播するのか (あるいはしないのか) に関する探究が主であったといえる。本稿ではこれ以上このタイプのイノベーション研究や普及過程は取上げないが<sup>4)</sup>、いずれにせよ第 2 次大戦後までは、今日におけるような企業における科学技術的なイノベーションは主題とはならなかったといえる。

### 3. シュンペーターの「新結合」

19 世紀半ばに経済学において (全商品の) 需給量が価格とともに決定される理想的静学的な

市場の平衡状態の定式化がなされたが、他方でそれは現実の経済の描像としてはマクロ的な経済循環や経済社会に生じている変化や発展の現象とは明らかに異なっていた。この懸隔を埋めるべく、20世紀になっていくつかの挑戦がなされた。その一つがJ.A. シュンペーターによるものであり、その重要な概念が企業者による「新結合の遂行」*der Durchsetzung neuer Kombinationen*である。ここでは景気循環論を本格的に展開する以前の彼の『経済発展の理論』(以下『発展』)における「イノベーション」に関する議論を中心に検討を行なおう。

そもそも上に定式化されたような経済「循環」*Kreislauf*の平衡点では何が生じているのか。一定の条件の経済人が市場において価格を信号として行動することで、徐々に取引が一点に収束していくような経済像である。意思決定を行なう経済人はすべての情報を持ち、その下で内生的に取引を行なうことでやがて市場がクリアされる。このような過程はワルラス的な試行錯誤 *tâtonnement* を動学化することによってより詳細に記述できる安定的な解とされる。これを現実 に即して解釈すると、慣行的でいわば通常の経営管理の範囲内のことであり歴史的時間の中での経済発展を惹起するようなものではない<sup>5)</sup>。しかし、このような扱いは、シュンペーター(1977上:2章)においては経済が発展するという重要な一面をとらえ損ねているとされ、経済を平衡点から逸らせるような経済内の変動をもたらす経済主体の行動を経済発展の主要因として注目した。以下、本稿の関心に即して整理し再構成を行なう。

経済発展は平衡状態とは異なり予めの記述や定式化が困難である(そもそもどう発展するかはわからない)。何らかの外生的な境界条件の変化だけでは別の平衡に移るだけであるし、それはしばしば人口変化のように取引に較べゆっくりした速度で生じるので、いわば準静的変化として扱う。現実の経済発展が観測されるとすると、系に内生的にショックを与え続ける主体とその行為とが必要となる。これが「企業者」の役割である。平衡点においては「企業者」は「軌道に沿って」意思決定を行ない、そのポジションを変えるような誘因を有しない。従前どおりの慣行を墨守しせいぜい価格信号に対応して行動するだけなので「経営管理者」あるいは「単なる業主」*Wirt schlechtweg*(まったくの執事のような意)というのが適当である。これにたいし、固有の意味の「企業者」はアイデアを考えついで異なる発想でビジネスの「軌道を変え」「流れに逆らう」ような意思決定を行い、その結果が上首尾であれば企業者利得 *Unternehmergewin* を獲得することができる。資本(原材料となる諸商品や設備等)、土地および労働の生産要素の代替的な組合せである「結合」について、企業者は現行の(相対)価格によらず変更することを行い、またそうすることが自由である<sup>6)</sup>。典型的には、経営管理者は一定の生産関数内で変数の値を与えるだけであるが、企業者はその係数を変えてしまうのである(同前:50-1)<sup>7)</sup>。

「新結合の遂行」においては担い手である企業者は「旧結合」*alte Kombinationen*(むしろ「既存結合」とすべきであろう)およびその経営管理者とおそらく並存して競争し、とくに完全雇

用経済においては究極的には生産要素の旧から新への転用が生じる<sup>8)</sup>。しかし、シュンペーターはドラマの第二幕を用意している。「新結合」は系全体に普及することでやがて「旧結合」となり、企業者は特別の利益の源泉を失い経営管理者に変わる。この転変を通じて企業者は経済全体の「変動機構の担当者」となる(同前:170)。このようにして、内生的な経済発展の観察から、その原因として企業者による単なる経営管理を超える「新結合」の遂行が論理的に導かれ、それは現実の一面を反映しているように見える。シュンペーターは続けて企業者の動機や指導者像について筆を進めるが、彼自身のいう心理主義や英雄主義的な『企業者びいき』“*unternehmerfreundlich*”の解釈が当時も現代もなされることが多い<sup>9)</sup>。ケインズなら簡単に「動物精気」として深入りしないような点を、『発展』ではあえて企業者の特性や資質にまで記載が及んでいるため、企業者像このような理解が絶えないのであろう。理論的には彼の企業者は第一義的には英雄というよりまず論理的に導出された変化のエージェントであり、それがどのような人物や企業であるか、また景気循環のどの局面で表れるか、それは群生的かどうか、模倣されうるかどうか(同前:第6章)などは実質的に別の問題構成で実証的な研究課題とされるべきである。企業者がイノベーションを行なうのはほとんど定義によってであり、それがどのような意義や様態を有するかは本来二義的課題であるといえる<sup>10)</sup>。

このような難点が指摘されうるものの、われわれにとって「新結合の遂行」の特質は何より「結合」およびその「遂行とそれを行なう主体」にある。ここで典型的には生産過程を想定した「結合」とは、

- 産出に対する投入の生産要素・諸財の支配的な補完的組合せ(投入産出構造)
- 投入・産出両面での産業エコシステムや循環経済全体への二次的影響
- たんなる発明とは異なる企業者による組織的・経済的な意思決定
- その産業における「新結合」の成功・普及による「旧結合」化

などの諸点を重視ないし含意することから、ある種の経済学的な投入・産出の観点からのビジネスモデル概念に相当すると考えることができる。とりわけ反射的に規定される「旧結合」はその産業に既存または現行の支配的なビジネスモデルと考えてよい。シュンペーターの好む例で示すと、それまでの郵便馬車は「新結合」によって鉄道と競合するようになるが、両者は産出される製品(この場合はサービス)の形態も投入される生産要素の結合のされ方もまったく異なる新旧のビジネスモデルであると解釈できる。ただ、産出側の扱いは後述のように課題であると考えられる。ともかくも、いま「旧結合」となりつつあるのはかつての「新結合」であり現「ビジネスモデル」である<sup>11)</sup>。



#### 4. イノベーションから生産関数へ

シュンペーターは発明に関して上記のイノベーション論におけるような位置付けはしていない。彼は、発明 *Erfindung* は「経済発展を喚起するのではなく、むしろ経済発展の結果である」(シュンペーター 1972: 330) もので採用に当たり企業者の役割が重要であることを強調し、後年には「発明 *invention* という語がなにを意味しようとも、われわれの問題には遠い関係しか持っていない」(シュンペーター 1958: 121) とまで述べ、発明という技術的な新知見を経営経済上の新機軸の首座としないことは一貫している<sup>12)</sup>。

よく知られているように、「新結合」に関してはその後ほぼ「イノベーション」でその用語が置換されるようになった。ただ、ある時点から明確な理由とともに完全に前者が後者によって概念的に置換えられた、とは言い切れない。シュンペーターの発想法を跡づけるために『発展』第2版以降の時期に関して若干の同型的表現の書誌的な情報を時系列でたどってみると、1927年には「新生産方法または新商業的結合の成功裡の遂行」*die erfolgreiche Durchsetzung neuer Produktionsmethoden oder neuer kommerzieller Kombinationen* (シュンペーター 2001a: 101, 斜字原文)、として、それまでの「新結合」は技術的な生産方法と経済的な生産要素の組合せとの選言的で説明的な記述に変化している。しかし、説明のために分って記述したものであろうが、そうすると余計に「商業的結合」が何を意味するのかかえって不明になると思われる。なお、企業者について書かれたこの時期のシュンペーター (1998ab) では『発展』とは同趣旨の内容ではあるものの「新結合」は用いられていない。

さて、同時期にシュンペーターは主として景気循環論の発展に着手し、また在職中のボン大学からハーバード大学への客員教授(その後1932年に教授)として渡米を経験し、論文での使用言語を独語から英語に替えている。その最初期の論文において、「イノベーション」の語によって、無限小の微分的変化では達成できないような「生産要素の組合せにおける変化」(Schumpeter 1927: 295) のことと理解するとあり、この箇所が「イノベーション」の初出と考えられる。また、「イノベーター」は「新結合」“new combinations”によって、以前に他のひとが購買し常用しているのと等量のフローの生産要素をいまや大はばに有利に使用することができるようになり、たんに資本足す利子額の回収のみならず、通常は——競争が激化するまでは——利益ももたらすであろう<sup>13)</sup> (同前: 303)。このように「結合」が英訳されイノベーションと並行して用いられていることがわかる。1928年のシュンペーター (2001b) では「生産的および商業的方法におけるイノベーション」と融合した表現を含め、イノベーションが優越するようになる。その点では、1931年の東大講演では以前に近い表現「新しい生産方法と新しい商業的な結合 *new methods of production and new commercial combinations* の

導入からなる産業上の変化」(シュンペーター 1991: 16) に復帰したものの、技術的内容と経済的内容とがここでは連言的に組合わされ、景気循環の局面と関連させてまとめてイノベーションの一語で表現されている。

以上より、シュンペーターが「新結合」からイノベーションへ移行するのは 1927-8 年の時期であり、景気循環論の主題に関連して英語を用いて「イノベーション」とほぼ現代的用法で書かれている。そこでも依然として「結合」概念は保持されているので決定的に概念的な移行ではないように思われるが、独語の「新結合」では企業者による「遂行」とのコロケーションが成立していたのにたいし、英語になると変更された生産要素の組合せをもっぱら表わすように用いられているようである。

両者の理論的な総合の試みは、『発展』の後の 10 年間の成果である『景気循環論』(シュンペーター 1958-1964: とくに I 第 3 章 B) においてなされた<sup>14)</sup>。ここでは、明示的に生産関数が導入される。一定の生産関数の下で投入される生産要素が量的に変化し、代替の弾力性によっては投入の組合せも変化しうるので、生産要素の組合せの変化という規定だけではこのような「旧結合」の範囲に止まる場合と真に「新結合」とを峻別することが困難である<sup>15)</sup>。さらに、先の例を思い出すと、郵便馬車と鉄道(あるいは内燃機関による自動車)とは同じ産出(たとえば「移動サービス」)かどうか、という問題も残されていた。そのため結局は、係数や産出の変化も含めて「イノベーションとはたんに新生産関数の設定と定義しよう」として、経済的な意味での生産とは生産に要するサービスの「結合」に他ならないので、「イノベーションは諸要素を新しい様式で結合すること、あるいは「新結合」New Combinations の遂行に帰着する」(同前: 126) とこの議論をまとめている。彼にあつては当初のアイディアは基本的に維持されているようである。

このようにイノベーションを新生産関数の設定とみなすことで、ほぼ一貫性のある定式化を得たかに見える。しかし、前節においてビジネスモデルに関して、新旧の「結合」(とくに「旧結合」)との一定の対応性を得たが、イノベーションではその過度の一般性およびもっぱら変化分への注目ゆえに、既存の「結合」との関係は失われ、投入側の既存の構造からあたかも産出が任意にデザインできるかのような、個別の「発明」に似た技術的な扱い、つまり「技術革新」に傾斜する虞が強まったといえる。「新結合」においては、投入側の生産要素の組合せの変化を伴うような新機軸によって新規または(おそらくは高効率や高品質の)既存の産出を得るというある種の因果連関、すなわち「発生的」(ウェーバー)な機序の説明が志向されることと対照的である。そもそも、たんに新基軸だけを重視するなら最初から「イノベーション」やあるいは *Neuerungen* だけを用いることも可能であったであろう<sup>16)</sup>。しかし、シュンペーターにあつてはあえて一種の内容語である「新結合」という理念型によって経済発展の要因を内生的で「発生的」に説明しようとする試みがなされた。残念なことに、その帰着は新古典派的な



生産関数であった (Ruttan 1959)。

そのため、あるビジネスを保有するまたは保有しようとする企業にとって「イノベーション」は、現行の「旧結合」(所有の有無とは別に)との損益を比較考慮した組織的な意思決定という側面が後景に退き、かわって発明や新技術の導入のような産出側の事象が前面化しているように思われる。「イノベーション」においては新技術を体化した製品等の下流側に関心が集まりがちなるであろうが、「結合」の変化は上流や周囲の既存のエコシステムに経済的社会的にも大きな影響を与えうることを意味している。前期シュンペーターにおいては「新旧結合」は論理的に導出されたとはいえ客観的に実証可能であるべき概念であったが、新生産関数たる「イノベーション」は柔軟に適用可能となったがそれだけ無規定といわざるをえない。

しかし、これらが妥当したとしても、シュンペーターのイノベーション論そのものが直ちに上記を含意しているとか、彼がもっぱらそのように考えていたとまではいえない。また、戦後になっても経済学的概念としてこのようなイノベーション概念が広く学会に「普及」したわけではない。Godin (2008: 35) は、F. マハルプを参照しながら 1960 年代においてもイノベーションの概念は広く受け入れられたわけではなかった、としている。また、ロジャーズ (1990) では、新規の農法や衛生法の農村社会へのマクロ的な普及の研究が主力であるので、個別経営的な企業者利得の獲得とはそもそも反する面があるためか経済・経営学的な研究分野は研究リストにあげられていない (マーケティングは主要な適用分野の一つとされているが、もっぱら採用者の分布論である)。上述のように研究の前提としてはイノベーションがただちに善であるとするような「イノベーション肯定バイアス」に警告を発している<sup>17)</sup>。今日のような肯定的で科学的技術的なイノベーション理解が普及するのはなお後年のことである。

さて、シュンペーターはその後「新結合」・イノベーション論をさらにどのように展開したであろうか。これ以上の追究は本稿の主題から離れるため備忘録的に記すと、直面する世界大戦を前提に、シュンペーター (1958-1964) の上述以外の部分では、景気循環の上昇面でのイノベーションの群生、そのための信用の状態、引き続いて生じる停滞、特許や差別化、これらの動きの産業や分野ごとの経済波動の合成の実証等について、またトラストや社会主義によって企業者が大組織の「鉄の檻」(M. ウェーバー)に入れられてしまうよう状況でのイノベーションの傾向などについて『発展』のアイデアを歴史的に展開している。ただし、これらが「新結合」の実証的な課題を果たしているかは疑問が残る (Andersen 2006; Croitoru 2017)。

さらに後年の『資本主義・社会主義・民主主義』(シュンペーター 2016: 207ff) において、資本主義は自らを変化に駆る機序を有している (唯一の?) 体制であることを強調するために、ケインズ的とされる短期的モデルに対抗して、またたんに「発展」とすることにも不足を感じたのか、それらに代えて「創造的破壊<sup>18)</sup>」こそが経済のダイナミズムのエンジンである、とした。シュンペーターの例によると、小売業態間の「小売の輪」の回転において「ハムレット

王子」を演じているのは資本主義自身の「創造的破壊」である。エルシノア城における悲劇のように小売業においても「旧結合」は滅亡に瀕しそこから「新結合」である次の業態が出現する。もはや個々の企業レベルでの「イノベーション」は主役を降りたかのようなのである。

## 5. BMI の問題点

ビジネスモデルが論じられるとき、その多くが「イノベーション」に代表される新規性とコロケーションを持つように思われる。試みに学術雑誌 *Long Range Planning*, Volume 43, Issues 2-3, April-June 2010 での有力なビジネスモデル特集を取上げてみよう。同号の Editorial (2010) によると *LRP* 誌はとくに 2000 年の再建以降、経営管理思想および戦略実行の一般的で多様な分野でアカデミアだけでなく上級管理者も読者としてきたが、その 10 周年にあたり C. Baden-Fuller が主宰して実務に最重要課題と思われるビジネスモデルについての論稿を多方面から求めた、とする。同特集は 4 つのテーマからなる計 19 本の論文が寄稿されている (表 1)。

表 1 *Long Range Planning* 43 (2-3), 2010 におけるビジネスモデル特集論文の分類

テーマ	論文数 <sup>1</sup>	うち該当数 <sup>2</sup>
1 理論的基礎	4	1
2 ビジネスモデルの出来	4	4
3 新興国と社会問題のための新ビジネスモデル	—	—
4 ビジネスモデルの実行	5	3
計	13	8

注 1) 全論文のうち、テーマ 3 の 4 本およびテーマ 4 の 2 本の論文を適合外として論文計から 6 本を除いて計算している。  
 注 2) 新規性、主体性にかかるキーワードを抽出した論文。詳しくは本文参照  
 資料) Editorial (2010), Executive summaries (2010) より筆者作成。

極小の有意サンプリングの例ではあるが、これら論文を Executive summaries (2010) に基づいてキーワードを抽出して新規性や主体性を重視しているか分類したところ、テーマ 1 の理論のうち 1 本について「デザイン」、「新技術」、ビジネスモデルの「選択」などから当該の分類とした。同様にしてテーマ 2 は、テーマの趣旨からそもそも全論文 4 本が新ビジネスモデルを取上げたものと考えられるが、はたして、「進化」、「発見」、BMI、「発展」、Web2.0、などのキーワードが見られた。テーマ 3 は本特集の一つの特徴であるが本稿では扱わないこととし、テーマ 4 の論文のうち「ビジネスシステム」や「個人のビジネスモデル」などは除外すると実証的な論文が含まれるが、その中では、BMI、ビジネスモデルの「更新の加速」とするものが 2 本あった。以上の概観より、そもそもどの論文も多かれ少なかれ新規性や主体性にふれないことはないののであるが、あえて簡易な分類をした結果「ビジネスモデル」に関

する論文の6割超で新規性・主体性を主題としていることがうかがえる<sup>19)</sup>。

この特集の該当論文のうち、たとえばBMIに関する代表的な論文Chesbrough（2010）について内容をみると、技術を有するだけでは競争優位を獲得できずに、それを活用できるようなビジネスモデルを新しく創出することが必要となり、これをBMIという。ゼロックス社の研究所PARCにおいて後のPCやシステムの基盤となる技術が開発されつつあったにもかかわらず、本社ではそのほとんどが採用されなかった有名なケースに言及し、本社ではコピー機とその使用枚数の増加ともっぱら関心と評価規準とがあったせいという。このようなBMIの機会に抵抗するのは、既存ビジネスの収益性や既存投資の圧力もあるが、社内の「支配的論理」であるとし、この認知上の障害を克服するためには試行錯誤によって新たにデータを蒐集する実験を行なうことを有効とする。

このように、本論文では有望な技術を所有していてもビジネス化できないことについて、対応するビジネスモデルの未確立に帰している。しかし、問題がこのように単純ではないということだけでなく、一方に新技術があり他方に新ビジネスモデルやそれについての経営上の意思決定が待たれるという図式自体を疑う必要があるのではないか。これはそれ以前のシュンペーターの「新結合」にもイノベーション論にもみられない技術論的な発想法である。

これとは反対の方向からビジネスモデル論を示している例は野中・徳岡（2012）のBMIに関する諸論文である。具体的なビジネスモデルの分析はOsterwalder & Pigneur（2010）のフレームワークを用いるなどに止まっているが、全体的には既存産業の「旧結合」の大局的な見直しを提起していることが特徴である。しかし、ここでの問題点は、個別のケースから規範的な命題を事後的に引き出していることと思われる。

以上はイノベーションとビジネスモデルとの関係やBMIに関する典型的な議論としての例をあげたが、新技術とその採否とを焦点化する問題構成には新規性や主体性が適合的であろう。あるいは既存産業とは異なるまったくの新産業として呈示されるときには個別のケースから得た「モデル」による規範論の形をとることがあるであろう。方向性は同一ではないにもかかわらず、このような問題構成をとる現代の「イノベーション」論やBMIには新規性、主体性と規範論とを特権的に結合する研究上のバイアスがあるように思われる。

ここでもう一度、シュンペーターの「新結合」を思い出すと、とくに反射的に想定される「旧結合」に関して、ある産業に属する企業の理念型としての投入産出構造、（そのエコ）システム全体への効果、組織的・経済的意思決定、「新結合」の一時性・累積性、をとくに重要な観点としてあげた。それによって、およそ「旧結合」が既存の支配的なビジネスモデルであり、「新結合」がBMIと理解することが可能であることが得られた。しかし、さらに「イノベーション」から「新生産関数」へと再定式化されるにいたり、投入および産出の両側での課題が出来てきたといえる<sup>20)</sup>。

産出側については、ある程度異なる具体的な製品・サービスを想定する場合か（関数の形状が異なる）、あるいは同じ社会的ニーズを満たす別の形態をいうのか（まったくの新関数）、について不確定であるように思われる。また投入側では、投入されるのが生産要素とするのは理論的に正当であっても現実の表象から遠くいかにも迂遠である。そのため諸財の「産業連関表」的な関連を想定することとした場合、独逸経済学における投入要素としての設備や資本ストック、またそれらから生じるであろうサービスの扱いが明示的にならないおそれがある。

そのためには、「イノベーション」のような新規性・差別化あるいは「生産関数」のような一般化ではなく、ビジネスモデルを個別の実務的な説明モデルや戦略論とは異なる理念型あるいは認識上の構成概念と位置づけるための理論構築と産業に固有の支配的典型的なビジネスのコアについての反省的実証的規定が必要であろう。今後いっそう進展するであろうデジタル化はそのような実体としての産業の中核プロセスを置換えうる変革であり、個別的なイノベーションとして扱うべきではないのではないか。ゆえにビジネスモデルを再訪・再検討することが重要と思われる。

## 6. 要約と結論

本稿では、ビジネスモデルとイノベーションとの関係について検討を行なった。まず「イノベーション」の用例の検討を行ない、16世紀前後のルネサンス期の欧州では政治上の新機軸、とくに既存の秩序や法制に対する変革やさらには叛乱を含意するものとして、ある程度否定的に理解される場合があることをみた。ただ、より一般的中立的な用法も存在した。下って20世紀前半では「イノベーション」は一般的な社会現象における新機軸とされ、それがどのように社会に普及するかという問題構成が出現し、その後の発展を見た。

政治や社会ではなく、経済や経営の分野にイノベーションを本格的にもたらしたのは20世紀初頭の独逸と奥とで活動したシュンペーターであった。同時代の欧州経済学が平衡状態の定式化に集中していたときに、それを前提としつつも現実のマクロ経済に明らかに観察されと思われる「経済発展」に彼は関心を寄せた。その結果、「経済発展」のエンジンは（典型的には）生産過程の生産要素（財）を従前とは異なる方法で結合して産出に効果を与えるような「新結合」にあるとし、それをあえて遂行する主体を平衡点付近で経営管理を行なうものとは異なる固有の意味での「企業者」という定式化を得た。つまり、シュンペーターの『経済発展の理論』（1912/26年）にあっては「企業者」の「新結合の遂行」によって「経済発展」が現実化するのである。加えて、この「企業者」の資質や信用の位置付け等について考察が進められたが、これらが彼の系に不可欠か、誤解を招くものではないかについては論点が残る。

「新結合」は、反射的に以前のまたは既存の「結合」である「旧結合」の存在を含意する。

「旧結合」は現下産業における支配的な生産過程のあり方を意味し、とくに投入産出構造、経済全体への二次的影響、発明とは異なる組織的経済的意思決定、「新結合」の普及による「旧結合」化などの諸点がビジネスモデル概念に対応していると考えられる。既存「ビジネスモデル」は「旧結合」であり、「新結合」はその変革であるといえる。

シュンペーターはその後新しく「イノベーション」概念を導入した。完全にある時期から「新結合」は完全に用いられなくなったのではないが、彼が活動の場を英語圏の米に移す『発展』第2版の直後の1927/8年頃から並行して「イノベーション」が使用され、変遷があるものの主要概念とされて事実上置換が行なわれた(ただし、「新結合」による説明も最後まで併記される)。1939年刊行の『景気循環論』において、「イノベーション」は「新生産関数」のこととされる。このことで、「新結合」の難点は表面的には「イノベーション」によって一元的に解決をみたことになるといえるであろうが、一般化が過ぎて分析における有用性が失われたように思われる。続く、第二次大戦中に刊行された『資本主義・社会主義・民主主義』(1942年)では、マクロ的な資本主義自体の「創造的破壊」に関心が向ったために、企業や企業者による「イノベーション」はほとんど用いられなくなったと思われる。

このようにシュンペーターは、非政治的・社会的で経済的・経営的な「イノベーション」を導入した先駆者であるといえるが、その過程は「新結合」はじめ曲折があり、また大戦後ただちに学会や実務で受容されたわけではなかった。さらに、今日的に「イノベーション」が科学技術上の革新・新機軸として肯定的に(というより定言的命令として)理解されるに至るにはなお失われた環が存在することになる。

さて、「イノベーション」が以上のようなものであるとすると、「ビジネスモデル」との関係はどう考えるべきであろうか。「新結合」について検討した際に導かれたように、「旧結合」が「ビジネスモデル」に、「新結合」がBMI(の結果)に相当するように整理できるのではないか。そのためビジネスモデルが実証的ではなく、新規性や主体性にかかわり規範的にとらえられるバイアスの発生がありうる。BMIにおいても、主意主義的規範的非組織的な特徴があり産業条件を等閑視することになりがちである。ビジネスモデルは産業に属する各社・ビジネスの中核のプロセスの理念型として扱えるのではないか。これらについては稿を改めて検討を行ないたい。

## &lt;注&gt;

- 1) ここでの検討は Godin (2008) の系譜的研究と類似の配列となっているが、ここでは必ずしも語源的文献的な追究が行なわれてはいないことと、イノベーションを中立的な **change** と内容的な **creativity** とに対比してとらえ、模倣や発明も含め広く 20 世紀のイノベーション研究に重点をおいている点などが本稿とは基本的に異なる。たとえば、シュンペーターに関しては、イノベーションと新結合との関係について、ほぼ前者に後者を包摂して検討されている (同前 36)。
- 2) <https://www.oed.com/view/Entry/96311?redirectedFrom=innovation#eid> (Retrieved in 2019/05/28.)
- 3) 同第 5 幕第 1 場 78 行の坪内 (1936 : 206) による訳文 (漢字・仮名遣いを現代的に改めている)。他の訳では、「ワッと何か一騒ぎ」(中野好夫)、「天地がひっくり返るような騒動」(小田島雄志)、「ひと騒ぎ」(松原和子) などがある。何らかの新鮮さという語義は消失しているかのようなのである。なお、シェイクスピアの他の作品での「イノベーション」については「ハムレット」(第 2 幕第 2 場 332 行)における劇団の興業にたいする新規の策の用例があり、また「オセロ」(第 2 幕第 3 場 36 行)では酒精による影響(キャッシュオー)のような、あえていうと広く肯定的でない使用法が見られる。
- 4) たとえば、Fagerberg & Verspagen (2009) は文献調査によってイノベーション研究の現状を、依然として学際的ではあるが経済学のシュンペーターの再理論化にかかわるような分野が優位としている。
- 5) 『発展』はよく知られているように 1912 年に出版 (前年の刊行年ともされる) されてから、第 2 版として 1926 年に大幅な改訂がなされ、現行版は基本的にこの第 2 版による。内容的には不変とされつつも、改訂点の一つが現代的には動学的という用語法に関しシュンペーターはしばしばこれを静学的と表記することに起因する一種の表現上の問題である。他の主要な改訂箇所は企業者の役割や位置付けの記述であり、それによって結論部分であった古典派経済学のような書きぶりの初版第 7 章 (シュンペーター 1972) が主として第 2 版第 2 章の企業者モデルへ統合・整理されたものの、後述のような問題を残している。Dekker (2018) は本書の各版や翻訳の異同の理論的な解釈を行なっている。
- 6) このような生産要素の組合せに関する意思決定を行なう企業者の機能は 18 世紀前半の仏経済学者の J.B. セイに由来し、とくにその第 1 回目は新結合に相当し創業者利得をえる、という (同前 202)。
- 7) 「結合」は生産要素の組合せといったんは説明されるが、直接的には諸財が投入されることになる。この点について生産関数に関して後述する。
- 8) シュンペーター (1977 上 : 183-6) は融通のためにここで信用を導入し、次の同書第 3 章で展開する。しかし、往時の一般平衡モデルをひな型にするように、レベルの異なる要素をモデルに直入して経済全体を説明しようとする『発展』に硬直化や矛盾をもたらしているものと思われる。Streissler (1994) はシュンペーターと彼の出自ともいえる独逸経済学との関係を深く根ざしたものとして取上げている。
- 9) 『発展』初版について「企業者類型の誇張的な「賛美」であると批判された (が) …そのようなものは傾向としても事実としても存在しない」あくまで中立的なものであると、第 2 版で抗弁している (同前 233-4 注 23)。それでもなお誤解の余地はあるように読める。
- 10) 経済の「発展」に関しても価値判断を留保して循環軌道からの内生的で質的な変化とされる (同前 : 2 章 1 節)。別の有名な箇所では、価値判断については何らかの基準が必要であり、それが明確ならたとえば抜歯の技術は確かに発展している (たとえばレイ 14 世以来) といえるのではないかと、経済分析も同様、としている (シュンペーター 2005 : 67-8)。
- 11) 「新旧結合」は、シュンペーターと交流のあったドラッカーによる企業の 2 つの機能との対応を思い出させる。また、レビットは「マイオピア」で旧結合を描写し、サービスの「創造的破壊」を強調する。独逸経済学とこれらの人物の思想の系譜的關係は今後の課題である (三浦 2019)。
- 12) 「発明」に関しては、たとえば『発展』第 2 版では言及がなく、シュンペーター (2001b) では経済にとって天候と同程度の (無) 関係とされる。
- 13) ここでは先に述べた「利益も損失もない」ワルラスの平衡を破る企業者利得を意味するのであろう。



- 14) *OED* ではこの 1939 年のシュンペーター (1958) の「イノベーション」が「商業」(経済経営の意) の下位項目での最初のエントリーとされている。したがって、上述のそれ以前の用例はともかく、この分野の本格的な使用例はシュンペーターをもって端緒とされている。なお、*OED* のこの項のエントリーにはロジャーズの 1962 年初版からの引用も採録されている。
- 15) 先の注でも述べたが、直接的にはフローの諸投入財およびストックの土地や「資本」、およびこれらに加えて「労働」も必要となるのが通常であろう。塊学派的には究極的には諸財は本源的生産要素の投入量に還元されるため、これら生産要素の「結合」ということは妥当である。この点後述する。
- 16) たとえば、「経営組織における多くの新機軸 *viele Neuerungen* およびすべての商業上の結合におけるあらゆる新機軸 *alle Neuerungen*」は一種の生産過程の改変である (シュンペーター 1977 下: 17), のように使い分けられている。なお、前者の例は大規模経営やより適切な立地であるが、結局これらも「新結合」とされる (同前: 17-8)。
- 17) 同書第 5 版もほぼ同様の記述である。
- 18) Reinert (2002: 23-4) によると用語自体は W. ズンバルトからの借用とし、あらためてシュンペーターと独歴史学派との関係を問題としている。
- 19) なお、Foss & Saebib (2018) によると 1980-2015 年間のビジネスモデルを主題とした論文数が 7,391 本数えられ、うち BMI 関連の本数は 349 本であるが急速に成長しているという。
- 20) 今回は取上げないが、「支配的 (ドミナント) デザイン」と「旧結合」との関係や「破壊的 (断絶的) イノベーション」と投入側の変数の「新結合」のあり方や産出側の変数が「旧結合」の場合と同一かどうかにかかる定式化の難点などの現代的課題にもつながる。関連する議論については三藤 (2016ab, 2017) にまとめられている。

#### <参考文献>

外国語文献の参照・引用箇所は邦訳のあるものについてはそれによって示した。ただし、訳書では「イノベーション」と「革新」等との混在などがあるため、原著を参照したときには訳書を参考にしつつも自由に訳している。シュンペーターの著作については、夫人の E. シュンペーターによる Schumpeter (1950) のリストでの掲載順とした。

- 池田伸 (2017). 「ビジネスモデルの理論の発展とその周辺」『立命館経営学』, 55 (6), 55-73.
- 野中郁次郎・徳岡晃一郎 (編著) (2012). 『ビジネスモデル・イノベーション：知を価値に転換する賢慮の戦略論』東洋経済新報社.
- 三浦一郎 (2019). 『ドラッカーの周辺』見洋書房.
- 三藤利雄 (2016a). 「「支配的デザイン論」の出現, 発展, そして普及」『立命館経営学』, 55 (1), 47-82.
- 三藤利雄 (2016b). 「Christensen 教授の弁明：破壊的イノベーションを巡る 2006 年の論争」『立命館経営学』, 55 (3), 53-82.
- 三藤利雄 (2017). 「レポー教授の破壊的イノベーション批判：白熱の攻防の先に何が見えるか」『立命館経営学』, 55 (4), 35-57.
- Andersen, E.S. (2006). The limits of Schumpeter's Business Cycles, *Industry and Innovation*, 13(1), 107-116.
- Bacon, Francis (1632). Of innovations, *Essays of Francis Bacon. (The Essays or Counsels, Civil and Moral, of Francis Ld. Verulam Viscount St. Albans)*.  
<http://www.authorama.com/essays-of-francis-bacon-25.html>. (Retrieved in 2019/05/17.)
- ベーコン, フランシス (1983), 渡辺義雄 (訳) 『ベーコン随想集』岩波文庫.
- Croitoru, A. (2017). Schumpeter, Joseph Alois, 1939, "Business Cycles: A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process", New York and London, McGraw-Hill Book Company

- Inc, *Journal of Comparative Research in Anthropology and Sociology*, 8(1), 67-80.
- Chesbrough, Henry (2010). Business model innovation: opportunities and barriers, *Long Range Planning*, 43(2-3), 354-63.
- Dekker, E. (2018). Schumpeter: Theorist of the avant-garde, *The Review of Austrian Economics*, 31(2), 177-94.
- Editorial (2010), *Long Range Planning*, 43(2-3), 143-5.
- Executive summaries (2010), *Long Range Planning*, 43(2-3), 146-55.
- Fagerberg, J., & Verspagen, B. (2009). Innovation studies: The emerging structure of a new scientific field, *Research Policy*, 38(2), 218-33.
- Foss, N.J., & Saebi, T. (2018). Business models and business model innovation: Between wicked and paradigmatic problems, *Long Range Planning*, 51(1), 9-21.
- Godin, Benoît (2008). Innovation: The history of a category. *Project on the Intellectual History of Innovation Working Paper*, 1, 1-67.
- Machiavelli, Niccolò (2009/1532). *Il Principe*, Ed. Sálvio Marcelo Soares, MetaLibri, 1 marzo 2009, v1.1s., Pp. 139.  
[http://www.ibiblio.org/ml/libri/m/MachiavelliNB\\_IIPrincipe\\_s.pdf](http://www.ibiblio.org/ml/libri/m/MachiavelliNB_IIPrincipe_s.pdf) (Retrieved in 2019/05/10.)  
 マキアヴェツリ (1998), 河島英昭 (訳) 『君主論』岩波文庫.
- Osterwalder, Alexander & Pigneur, Yves (2010). *Business Model Generation : A Handbook for Visionaries, Game Changers, and Challengers*, John Wiley, Pp.281.  
 アレックス・オスターワルダール, イヴ・ピニユール (2012). 小山龍介 (訳) 『ビジネスモデル・ジェネレーション: ビジネスモデル設計書: ビジヨナリー, イノベーターと挑戦者のためのハンドブック』翔泳社.
- Reinert, E.S. (2002). Schumpeter in the context of two canons of economic thought, *Industry and Innovation*, 9(1-2), 23-39.
- Rogers, Everett M. (1982). *Diffusion of Innovations*, 3rd Edition, Free Press.  
 Pp.xix+453.  
 ロジャーズ, エベレット (1990), 青池慎一・宇野善康 (訳) 『イノベーション普及学』産能大学出版部 (第 3 版の邦訳).  
 5th Edition, 2005, Free Press. Pp.xxi+551.  
 ロジャーズ, エベレット (2007), 三藤利雄 (訳) 『イノベーションの普及』翔泳社 (第 5 版の邦訳).
- Ruttan, V.W. (1959). Usher and Schumpeter on invention, innovation, and technological change, *The Quarterly Journal of Economics*, 596-606.
- Schumpeter, Elizabeth B. (1950). Bibliography of the writings of Joseph A. Schumpeter, *The Quarterly Journal of Economics*, 64(3), 373-84.
- Schumpeter, J.A. (1912). *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, erste Aufg. Duncker & Humblot.  
 Pp.viii+548.  
 シュンペーター, J.A. (1972), 「国民生活の全体像」, 佐瀬昌盛 (訳) 『社会科学の過去と未来』ダイヤモンド社, 所収 (初版第 7 章の邦訳).  
 Second revised edition (subtitle first appears with this edition, *Eine Untersuchung über Unternehmergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus*). Duncker & Humblot, 1926.  
 Pp.xiv+369.  
 シュンペーター, J.A. (1977), 塩野谷祐一・中山伊一郎・東畑清一 (訳) 『経済発展の理論』上・下, 岩波文庫.
- Schumpeter, J.A. (1927). Unternehmerfunktion und Arbeiterinteresse, *Der Arbeitgeber*, Bd.17, 166-70, in W.F. Stolper und Chr. Seidl, Tübingen (hrsg. u. eingel.) (1985). *Aufsätze zur Wirtschaftspolitik / Joseph A. Schumpeter*, Mohr, 160-72.

- シュンペーター, J.A. (2001a), 八木紀一郎 (訳) 『資本主義は生きのびるか: 経済社会学論集』名古屋大学出版会, 第3章所収.
- Schumpeter, J.A. (1927). The explanation of the business cycle, *Economica*, (21), 286-311.
- Schumpeter, J.A. (1928). "Unternehmer," *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 4. Auflage, Bd.8, 467-87.
- シュンペーター, J.A. (1998a), 清成忠男 (訳) 『企業家とは何か』東洋経済新報社, 第1章所収.
- Schumpeter, J.A. (1928). The instability of capitalism, *Economic Journal*, 38, 361-8.
- シュンペーター, J.A. (2001b), 八木紀一郎 (訳) 『資本主義は生きのびるか: 経済社会学論集』名古屋大学出版会, 第4章所収.
- Schumpeter, J.A. (1928). Der Unternehmer in der Volkswirtschaft von heute, in *Strukturwandlungen der Deutschen Volkswirtschaft*, 295-312, in W.F. Stolper und Chr. Seidl, Tübingen (hrsg. u. eingel.) (1985). *Aufsätze zur Wirtschaftspolitik / Joseph A. Schumpeter*, Mohr, 226-47.
- シュンペーター, J.A. (1998b), 清成忠男 (訳) 『企業家とは何か』東洋経済新報社, 第2章所収.
- Schumpeter, J.A. (1931). Theory of the business cycle, 『経済学論集』第2巻第1号, 1-18.
- シュンペーター, J.A. (1991) 「景気循環の理論 (1931)」, 金指基 (編訳) 『景気循環分析への歴史的接近』叢書ベリタス, 八朔社, 第1章所収.
- Schumpeter, J.A. (1939). *Business Cycles: A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process*, McGraw-Hill Book, 2 vols. Pp.xvi+ix+1095.
- シュムペーター, J.A. (1958-1964). 吉田昇三 (監訳), 金融経済研究所 (訳), 『景気循環論: 資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析』全5巻, 有斐閣.
- Schumpeter, J.A. (1942). *Capitalism, Socialism and Democracy*, Harper & Brothers, 1942. Pp.x+381.
- シュムペーター, J.A. (2016). 大野一 (訳) 『資本主義, 社会主義, 民主主義』全2巻, 日経BPクラシックス.
- Streissler, E.W. (1994). The influence of German and Austrian economics on Joseph A. Schumpeter, 13-38, in Streissler, E.W., Shionoya, Y., & Perlman, M. (eds.). *Schumpeter in the History of Ideas*, The University of Michigan Press, Pp.135.
- Tard, Jean-Gabriele (1890), *Les lois de l'imitation: étude sociologique*, Félix Alcan. Pp.viii+431.
- タルド, ガブリエル (2016), 池田祥英・村澤真保呂 (訳) 『模倣の法則』新装版, 河出書房新社.

## Business Models and Innovation: A Critical Assessment

Shin Ikeda \*

### Abstract

A notion business models is not so much common or reluctant to accept in academic management literatures whilst accepting and prevailing in business community. It might be claimed mostly due to a lack of clarity of the concept, business models would be less contributed to or hamper accumulation of knowledge in the field of management science. Innovation and business models are closely related in today's management literature and practice so that it makes a collocation of business model with innovation, i.e. business model innovation, BMI. For BMI, however, carries connotation of novelty, by BMI only a new or the changed business models might be discussed.

In this paper we made a genealogical study on innovation with various usages in the Renaissance period of Europe and after, with special reference to J. A. Schumpeter's works. We found that innovation was not necessarily entailed technologies or novelty before WWII was over, so that an incumbent structure of a business might bring into a business models research. If BMI studies is solely or mostly conducted, it might cause some lacunae and bias in the research in business models.

### Keywords:

business models, innovation, business model innovation, J.A. Schumpeter

---

\* Professor, College of Business Administration, Ritsumeikan University